



主催 越桐國雄 (こしぎりくにお)

koshi@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

'99 『インターネットと教育』フォーラム 実行委員長

K12 『インターネットと教育』研究協議会 代表

年令：46歳

所属：大阪教育大学 教育学部理科教育講座

役職：教授(国立大のリストラ進行中なので将来が不安 -_-;;)

勤務年数：18年(あと2年でなにかもらえるらしいが・・・)

専門分野：原子核物理学、インターネットの教育利用、理学博士

現在の関心事：大阪地域および大阪教育大学の活性化

「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes

インターネットをはじめて利用した年 1991年4月頃

インターネットをはじめて教育利用した年 1992年4月頃

'99 『インターネットと教育』フォーラム

情報技術の進展とインターネットに代表されるコンピュータネットワークの拡大によって、いま社会が大きく変わろうとしています。学校もまたその例外ではありません。2001年には日本全国の学校のインターネットへの接続が計画され、それに続いて実施される新しい学習指導要領では「情報」というキーワードが学習内容や方法に深くかかわろうとしています。

しかし、全国の学校に及ぶ、あまりにも急速な環境変化が、一部では話しや不安といった問題を引き起こしていることも事実です。

'99『インターネットと教育』フォーラムでは、大会テーマに「情報教育の新展開 ~インターネットと情報倫理~」を掲げ、特に、インターネット利用の「影の部分」といわれる諸問題、例えば、セキュリティ、モラル、プライバシー、詐欺情報などの対応を考えるいわゆる「情報倫理」について、専門家の講演や、具体的な教育実践の紹介を通じて、積極的に検討します。また、今後、学校で課題となるテーマを問題提起し、参加者のみなさんをまじえて、大いに語り合いたいと考えています。インターネットと教育の未来について大いに語り合しましょう。

Progress of new information and communication technologies, such as the Internet and the multimedia environment, brings a great change in our society and its education system. The Japanese government plans to extend the Internet connectivity to all the schools (42,000) until 2001. Furthermore, the new national curriculum (Course of Study) will start at 2002, which introduces a new keyword "INFORMATION" in both the contents of learning and the method of education. However, such a great change in our education system induces confusion and anxiety among many teachers.

The purpose of this symposium, "Forum on K-12 Education and the Internet '99" subtitled "-- the Internet and Information Ethics --", is to organize well experienced teachers on the information and communication technologies, and to support the new comers of this land of the Infomedia Education. Our main focus is the dark side of the educational use of the Internet, in relation with, privacy, piracy, safety, data security, data integrity, competence, honesty, loyalty and fairness. We usually call them as "Information Ethics" and the main theme of the symposium is the "Information Ethics Education".

The starting point of our discussion is to show the pilot curriculums along which our members teach in their classroom, and also we have some lectures of professional researchers. We would appreciate the exciting discussions between our members and the audience of the symposium. We are looking forward to seeing you all.

開会 辻井重男(つじいしげお)

日本学術振興会未来開拓推進事業
電子社会システム

本フォーラムの開催に当りまして、一言、御挨拶させていただきます。

日本学術振興会では現在、未来開拓学術研究推進事業を積極的に展開しており、百を超えるプロジェクトが進行中であります。これらの殆どは自然科学あるいは工学系のプロジェクトであり、その中において、私が委員長を務めております電子社会システム研究推進委員会は例外的な存在であります。本委員会の下に、法律、経済、著作権等の社会的システムに関する3つのプロジェクトと合せて、「情報倫理の構築」と題するプロジェクトが設置され、活発な研究活動が進められております。

さて、情報ネットワークの地球規模での浸透によって、国境を超えたサイバー世界が築かれようとしており、その中で、経済システムや法制度はもとより、人々の価値観や倫理についても再構築が求められております。

日本は、幕末から明治への変革期を乗り切り、強兵政策による挫折は別として、1980年代までほぼ順調に富国を達成してきました。この間、知識人達は、近代の超克に悩み続けていました。例えば、夏目漱石は「神経衰弱にならない程度に内発的に変化していきましょう」と言い、河上徹太郎は、良く知られている座談会「近代の超克」（昭和17年）を“日本人の血と不様に体系づけてみた西洋知性の超克”と締めくくっております。

こうした知識人達の悩みをよそに、日本人が内発的に変化することもなく、経済面で成功を収めることができたのは、農業社会と大量生産型工業社会が、ムラ社会の中での情緒的連帯感や集団志向性の強い日本人向きの社会という面では同質的であったからではないでしょうか。

しかし、情報社会は農業社会や工業社会とは異質の社会です。そこでは、自立した個の強さや、合理的精神と観念的な世界に対する豊かな想像力を合せもった高い知性が要求されます。

日本人も“内発的”に変わっていかなければ、グローバルな情報社会を生き抜いていくことは難しいと思われま

す。
こうした観点から、本フォーラムのテーマ『インターネットと情報倫理』は極めて重要なテーマであり、今日一日十分に、議論が深められることを期待致しまして、私の御挨拶とさせていただきます。



講演 後藤滋樹(ごとうしげき)

goto@goto.info.waseda.ac.jp

年齢：50歳

所属：早稲田大学 理工学部 情報学科

役職等：教授

勤務年数：3年10ヵ月

専門分野：情報科学・情報工学 (工学博士)

現在の関心事： ネットワークの社会的な影響を測定する
「を学校の児童・生徒 全員に与えるべきか」 条件付きYes

インターネットをはじめて利用した年 1984年8月頃

インターネットをはじめて教育利用した年 1996年9月頃

演題「日本のインターネットの歴史と教訓」

ヒューマンネットワークが重要

そもそも、私がインターネットの関係者であるような顔をしているのは何故か。それは日本のインターネットの草分けと言われる JUNET に関わっていたからです。

当時の JUNET の構成図を見ますと、国内の接続が「仲良しクラブ」であったことが容易に想像できます。JUNET の国内接続を拡大したのは野島久雄氏 (NTT 研究所) ですが、私は彼の傍にいて、新規の接続が知人・友人の関係を通して拡大する様子がありました。

一方で、コンピュータ・ネットワークに人間社会の側が影響を受けることも、以前から良く認識されています。私が電子メールによる通信を最初に経験したのは1979年の秋です。ただし、電子メールといっても、届く範囲は同じ研究室の中だけです。それが遠距離に拡大したのは、私が武蔵野の研究所から横須賀に転勤となりまして、その二研究所間の実験用回線の一部を借用して、モデムによる通信を開始した頃です。私は電子メールによって、遠隔地の研究室の話題に日常的に触れることができました。

疲れを知らないコンピュータ

JUNET時代の思い出として、今でも良く記憶しているのは、米国との接続の苦勞です。1985年にスタンフォード大学の Shasta というマシンの管理者と相談をしまして、NTT研究所とスタンフォード大学の間で uucp、つまり JUNET と同じ通信方式を実現しました。

これが難物です。モデムを使って国際電話でリンクを確立します。料金の関係で夜中の11時に通信を自動スタートさせます。ただし何故か人間が debug モードで見張っていると成功率が高く、放置すると失敗します。後に、失敗の原因はスタンフォード大学の構内の電話回線の品質が悪いためと判明するの

ですが、こちらは毎晩のように自宅から深夜にマシンの運転状況をモニタしていたので、関係者は全員が睡眠不足となっていました。

コンピュータには人間の真似ができない、人間は賢い、という主張があります。人工知能などの分野では、そのように見えることがありますが、通信となると人間はコンピュータにはかまいません。Shasta の話では、人間は見張るのが精一杯で、コンピュータに代わって通信をするわけではありません。その後は通信量が急激に増大して、見張ることもできなくなりました。

電子喧嘩の驚きと感動

今になってみると不思議な気持ですが、電子メールやニュースに日本語が使えるようになったのは、JUNET が開始されてから随分時間が経過した後です。

それ以前はどうしていたかということ、日本人同士でも英語を使うか、あるいはローマ字です。面白い統計があります。JUNETの時代には、ニュースシステムが情報交換や広報に盛んに使われていました。そのニュースの投稿記事の数を見ると、日本語つまり漢字が使われるようになってから急増しています。

それと同じ頃に電子喧嘩、つまりメールやニュースの上での喧嘩も始まりました。電子喧嘩の方が普通の口喧嘩に比べて「しつこい」と言われています。そのような心理学者の研究もあります。

電子喧嘩の出現は、当時のネットワーク関係者に困惑を覚えさせました。同時に不思議な感動も与えました。メールやニュースが喧嘩に使えるということは、メディアとして十分な力を持っていることを示しているからです。

商用への感覚は米国でも欠如

ここで80年代を通しての反省をしてみます。後に90年代になってインターネットが商用化されるのを、

なぜ 80 年代に見抜けなかったか、という問題です。

これは日本には限りません。米国でも 80 年代には ARPAnet, それを引き継いだ NSFnet, いずれも研究教育用という目的を明示しており, 商用利用は御法度でした。実際に大学や研究機関では, ネットワークを抜きにした生活は考えられなかったのに, です。

この問題の分析は広範な分析を必要とするかもしれません。ここでは, 社会の進展というものは一足飛びには実現できない, という教訓として受け止めておきます。

新奇の試みと手応え

90 年代に入ると米国での商用化があり, 日本でもインターネットが急速に拡大して行きます。またネットワークの使用法も WWW の登場で激変します。

このような流れを日本は後追いしたように書かれることがあります, 事実は少し異なります。WWW の先駆となった gopher に類似したシステム, あるいは Java に先行するような遠隔言語の研究は, 日本でも行われていたのです。

ただし, そのような萌芽的な研究は, 日本では大規模に展開されることはなく, ごく一部の関係者だけが知るものでした。その原因を私なりに考察してみますと, 研究者は周囲から適切な反応が与えられないと, 自分の研究成果を正しく認識できないように思われます。つまり研究というのは一見すると俗社会とは隔絶している(象牙の塔)ように見えるかもしれないのですが, 実は社会的な活動に他なりません。

最近では日本の研究者にもベンチャーキャピタリストの目が注がれているようです。本当に事業化されるかどうかは別としても, 社会の側からの反応があるのは良いことだと思っています。

インターネット博物館の必要性

本稿を準備する過程でも, 幾つかの「古文書」を参照しました。インターネットは進展が早く, ほんの少し前の資料が歴史的な文書になっています。

コンピュータ博物館は世界各地にあるようですが, インターネットは遅れています。WWW は電子図書館のような働きをしていますが, 実は古文書にアクセスできません。一旦リンクが外されてしまうと, 昔の情報には手が届かないのです。

このような状況は急いで改善する必要があります。特に学校教育に関しては, 目下の大変化を直ちに分析はできないとしても, 少なくとも記録に残す必要があります。私が本講演で強調したいことの一つは, 「皆さんは日記をつけていただきたい」ということです。

メールの返事は 48 時間以内に

電子メールが普及した後で, 次のような統計を取ったことがあります。電子メールを受け取った人が何時間以内に返事を出すか。

返事を出すまでの時間の分布を調べると, 大抵の人は 48 時間までに返事を出しています。これは経験的な数値と一致します。メールを出して二日間たっても返事がない時は心配になります。

しかし即答で返事を出せないことがあります。委員会を開いて審議する必要がある, そこまで行かなくても数人で相談をしないといけません。このような場合でも, 相手にはメールを受取った確認の返事だけは出しておいた方が良いでしょう。

これは私の苦い経験に基づいています。ある国際会議をアジアの某国で開催するのを手伝った時の話です。主催者は米国にいます。某国の現地とメールで連絡をするのですが, 返事がありません。ゼロではないのですが, 20 通のメールに対して 3 通の返事という比率です。これでは会議は実現できないと, 主催者側は諦めてしまいました。

社会の変化と孤立

本日のフォーラムに参加されている方々は, 社会の最先端で活躍している人達です。このようなパイオニアは, もちろん尊敬されるのが当然ですが, 往々にして社会に理解されない場合もあります。

インターネットの世界でも悲劇があります。或る会社ではネットワークの担当部署が正式に決まった途端に, それまでのボランティアの推進者と対立してしまったのです。パイオニアが, あまりにも社会から進みすぎると, 理解者がいなくなります。人間社会には安定を保つメカニズムが組み込まれていますので, あまりに急進的な行動に対しては自動的にブレーキが働きます。パイオニアも大切ですが, 理解者層の役割を軽視してはいけません



講演 越智貢（おちみつぐ）

mochi@ipc.hiroshima-u.ac.jp

「情報倫理の構築」プロジェクト（FINE） FINE広島

年齢：47歳

所属：広島大学文学部

役職等：教授

勤務年数：約15年

専門分野：応用哲学、応用倫理学

現在の関心事：「情報倫理の構築」プロジェクト（学術振興会）

「を学校の児童・生徒 全員に与えるべき」 条件付きYes

演題「情報倫理と教育」

私の話の要点は単純である。次の三点で言い尽くせる。

1. 電子ネットワークの世界でモラルを確立しようとするれば、「よい人」を育てること以外にはないこと。
2. その意味でも、ネットワーク世界と日常世界とは連動していること。
3. それゆえ、いわゆる「情報モラル」の教育だけで事足りるとすることはできないこと。

日頃付き合いのある先生方の多くは、情報教育に不安を感じていると話す。不安はおおよそ二つに大別できる。一つは、時間に関する不安。そして、いま一つは、子供たちが引き起こすであろうトラブルへの不安。

情報機器の操作に不慣れな先生は、新しい知識や技能を身につけるための時間と労力を考えてため息をつき、逆に熟練者の先生は、それまでボランティアとして行ってきた機器管理が職務となることでいっそう自由な時間を奪われるだろうことを考えてため息をつく。

しかも、いくらフィルタリングを施しても、日常頻発するトラブルに輪をかけたトラブルが生ずることが予感され、これに対処するためには、さらに多くの時間と労力が奪い取られることが予想される。現状でも子供たちと十分なコミュニケーションをしようほどの「ゆとり」を見出せないのに、情報教育

が始まれば、さらにゆとりのない生活になってしまう。このように心配する先生にとって、情報教育の導入は面倒をもたらすやっかいものでしかない。

かくして、次のような意見をもつにいたる先生も少なくない。「私自身は学校教育現場にコンピュータは導入すべきでないと思う。いま言われているのは『心の教育』である。血の通った人間同士のふれあい、関わり合いを大切にされた教育が見直されているし、私もそう思う。不便でも、合理的でなくても、とくに小学校には、そのことをしっかり体験させておくべきだと思う。」（「情報倫理の構築」プロジェクト・アンケート結果）

この先生の意見とは異なり、私自身は是非とも情報教育が必要だと思っている。子供たちが引き起こすはずのトラブルにもそれほどの心配はしていない。かえって、トラブル・メーカーとして生きている子供が、一切のトラブルから隔離されてしまえば、人生の知恵を学習する重要な機会が奪われてしまうとすら考えている。

ただし、上記の先生の言葉には、私の意見に近い考えも含まれている。それを表現しようとしたのが、上記の三命題である。すなわち、電子ネットワークの世界のモラルは、情報モラル教育（だけ）によって実現できるものではない。情報モラルは「よい人」の育成を可能にするモラルではなく、いわば「よい人」を前提にしたモラルだからである。

教育実践報告発表者、集中ディスカッション討論者プロフィール

小学校/盲聾用語学校の部

石原 一彦(いしはら かずひこ)

コーディネイター kazu.ishihara@nifty.ne.jp

年齢： 42歳
所属： 滋賀県大津市立瀬田小学校
役職等： 教諭
勤務年数： 16年
専門分野： 中国文学(?)
現在の関心事：「CEC 校内LAN-WG」、「CECレーティング-WG」、「JAPET 情報推進コーディネーター-P」、「JAPET 海外日本人学校-P」、「IPA 文字入力」、「IPA学習素材研究班」
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 Yes
インターネットをはじめて利用した年 95年6月頃
インターネットをはじめて教育利用した年 95年7月頃

発表者 宝 迫 芳 人(ほうさこ よしと)

ttn0v0n06y@mx2.ttcn.ne.jp

年齢： 29歳
所属： 朝霞市立朝霞第六小学校
役職等： 教諭
勤務年数： 3年6ヶ月
専門分野： 小学校全科しか免許は持っていません。
現在の関心事：算数教育研究会(朝霞市)、情報教育、
プラスバンドクラブ担当
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」
小学生No、中学生以上条件付きでyes
インターネットをはじめて利用した年 95年7月頃
インターネットをはじめて教育利用した年 98年10月頃

発表者 榎 崎 安 江(えのさき やすえ)

yasue@urban.ne.jp

年齢： 44歳
所属： 熊野町立熊野第四小学校
役職等： 教諭
勤務年数： 21年(総計で)
専門分野： 小学校：(研究教科は音楽)
現在の関心事：Eスクエアプロジェクト
「メールアドレスを児童・生徒全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年 95年10月頃
インターネットをはじめて教育利用した年 96年8月頃

発表者 幸 地 英 之(こうち ひでゆき)

kochi@ryukyu.ne.jp

年齢： 36歳
所属： 沖縄県立森川養護学校
役職等： 教諭
勤務年数： 11年
専門分野： 化学
現在の関心事： 特殊教育への情報機器の活用
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年 95年頃
インターネットをはじめて教育利用した年 95年頃

中学校の部

長 谷 川 元 洋(はせがわ もとひろ)

コーディネイター ghase@logob.com

年齢： 34歳
所属： 三重県松阪市立中部中学校
役職等： 教諭(情報教育、環境教育、国際理解教育)
勤務年数： 12年(教員になってから)、現任校は1年目
専門分野： 教育学修士、教育工学
現在の関心事：
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年 95年1月頃
インターネットをはじめて教育利用した年 96年1月頃

発表者 今 塚 生(こん たくお)

takuo@jan.ne.jp

年齢： 36歳
所属： 小国町立白沼中学校
役職等： 教諭
勤務年数： 教職13年目 白沼中5年目
専門分野： 理科
現在の関心事：K12『インターネットと教育』研究協議会
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年 95年8月頃
インターネットをはじめて教育利用した年 95年12月31日

発表者(共同) 辻 慎 一 郎(つじ しんいちろう)

PPD02445@nifty.ne.jp

年齢： 36歳
所属： 鹿児島県出水郡東町立鷹巣中学校
役職等： 教務主任
勤務年数： 14年
専門分野： 情報基礎
現在の関心事： 初心者の方のスキルアップ
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 わからない
インターネットをはじめて利用した年 95年頃
インターネットをはじめて教育利用した年 95年頃

発表者(共同) 永 留 貢(ながとめ みつぐ)

mitsugu@nagatome.com

年齢： 33歳
所属： 上屋久町立宮浦中学校
役職等： 教諭
勤務年数： 現籍校2年、勤続11年
専門分野： 理科教育、情報教育
現在の関心事：屋久島プロジェクト(アジア太平洋地域の世界
自然遺産登録地周辺の学校をネットワークでつなごうというプ
ロジェクトを進めているところです。
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
(地域ネット等の閉じたネットワーク内での発行)
インターネットをはじめて利用した年 96年
インターネットをはじめて教育利用した年 97年

教育実践報告発表者、集中ディスカッション討論者プロフィール

高等学校の部

高橋 邦夫 (たかはし くにお)

コーディネイター ktaka@cgh.ed.jp

年令： 38歳
所属： 東金女子高等学校
役職等： 校長
勤務年数： 16年
専門分野： 博士（理学）物性物理学
現在の関心事： 情報倫理、TNPJP
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付き^{Yes}
インターネットをはじめて利用した年95年5月頃
インターネットをはじめて教育利用した年95年7月頃

発表者 浦田 治 (うらた おさむ)

ourata@nic.ad.jp

年令： 38歳
所属： 三重県立菟野（こもの）高等学校
役職等： 教諭
勤務年数： 9年
専門分野： 高校数学
現在の関心事： iDNSの行方
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 No

発表者 奥村 稔 (おくむら みのる)

okumura@ryoun.ed.jp

年令： 42歳
所属： 北海道旭川凌雲高等学校
役職等： 情報システム部長
勤務年数： 21年（現任校には16年）
専門分野： 数学 / 教育学修士
現在の関心事： 地域分散広域統合型自律的学習環境の構築プロジェクト、認知科学的な発想を教育現場に持ち込むこと
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 Yes

集中ディスカッション

討論者 前田 真理 (まえだ まり)

mmaeda@urban.ne.jp

年令： 37歳
所属： 広島市立吉島東小学校
職名： 教諭
勤務年数： 15年（本校には10年）
専門分野： 算数・数学
現在の関心事： ネットdeがんすプロジェクト
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 Yes
インターネットをはじめて利用した年94年夏
(操作させてもらったのは95年夏)
インターネットをはじめて教育利用した年95年10月頃

討論者 藤田 賢一郎 (ふじた けんいちろう)

fujiken@coral.ocn.ne.jp

年令： 37歳
所属： 新潟県上越市立城西中学校
役職等： 教諭
勤務年数： 15年（上越教育大附属中学校に6年間勤務）
専門分野： 技術・家庭担当、情報教育、総合的な学習
現在の関心事： 先進的教育用ネットワークプロジェクト
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付き^{Yes}
インターネットをはじめて利用した年94年11月頃
インターネットをはじめて教育利用した年95年1月頃

討論者 杉崎 忠久 (すぎさき ただひさ)

tadahisa@mahoroba.ne.jp

年令： 43歳
所属： 奈良県立大淀高等学校
役職等： 教諭、進路指導部長
勤務年数： 2年8ヶ月
専門分野： 生物
現在の関心事：
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 Yes
インターネットをはじめて利用した年 93年?月頃
インターネットをはじめて教育利用した年93年3月頃?

討論者 西田 光昭 (にしだ みつあき)

nishida@kiu.ad.jp

年令： 42歳
所属： 柏市立教育研究所
役職等： 指導主事
勤務年数： 2年（教員になってからは、20年）
専門分野： 小学校
現在の関心事： 先進的教育用ネットワークモデル地域事業に参加しています。関心があるのは、仮想の世界と現実の世界は子どもの中でどう結びつのか
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付き^{Yes}
インターネットをはじめて利用した年95年7月頃

討論者 後藤 邦夫 (ごとう くにお)

goto@iq.nanzan-u.ac.jp

年令： 2A (hex)
所属： 南山大学経営学部情報管理学科
役職等： 教授
勤務年数： 14年
専門分野： 工学博士（京都大学）
現在の関心事： インターネット技術、地域ネットワーク活動（東海インターネットワーク協議会、インターネットの教育利用（東海スクールネット研究会、この協議会等）、情報倫理教育振興（(社)私立大学情報教育協会）
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 Yes
インターネットをはじめて利用した年86年8月頃
インターネットをはじめて教育利用した年88年4月頃

教育実践報告発表者、集中ディスカッション討論者プロフィール

集中ディスカッション司会

コメンテーター 土屋 俊(つちや しゅん)

tutiya@chiba-u.ac.jp

年令： 46歳
所属： 千葉大学文学部
役職等： 教授、千葉大学附属図書館長
勤務年数： 17年
専門分野： 哲学
現在の関心事： 音声対話、技術史、言語哲学、情報倫理
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 No
インターネットをはじめて利用した年86年7月頃
インターネットをはじめて教育利用した年94年4月頃

中島 康明(なかじま やすあき)

nakashima@osakapref-sb.ed.jp

年令： 43歳
所属： 大阪府立盲学校
役職等： 教諭
勤務年数： 教員生活19年目
専門分野： 免許は数学
現在の関心事： 障害者支援、学校間・地域・国際交流、情報教育、教育の情報化(Daicom,Djk,Ojk,MES,ACE,MEF,OK11ほかいろいろ)
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年95年3月頃
インターネットをはじめて教育利用した年95年5月頃

総合司会

吉田 智子(よしだ ともこ)

tomo@tomo.gr.jp

所属： 京都ノートルダム女子大学
役職等： 講師
専門分野： 情報科学・情報工学(工学博士)
現在の関心事： ネットワークの社会的な影響を測定する
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年84年8月頃
インターネットをはじめて教育利用した年96年9月頃

宮澤 賀津雄(みやざわ かづお)

miyazawa@jeric.gr.jp

年令： 35歳
所属： 早稲田大学大学院理工学研究科
川崎市立川崎総合科学高等学校
役職等： 大学院生、教諭
勤務年数： 大学院3年、教員歴12年
専門分野： 情報科学(修士)
現在の関心事： 早稲田大学教育支援プロジェクト(JERIC)の方向性
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 条件付きYes
インターネットをはじめて利用した年 93年8月頃か？
インターネットをはじめて教育利用した年 94年4月頃

フォーラム事務局

〒263-0855 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学文学部「情報倫理の構築」プロジェクト
インターネットと教育フォーラム実行委員会
<http://forum.jr.chiba-u.ac.jp/> forum-pc@jr.chiba-u.ac.jp
直通 TEL 070-562-02183 FAX 043-290-2278



芳賀高洋(はが たかひろ)

jtaka@jr.chiba-u.ac.jp

年令： 29歳
所属： 千葉大学教育学部附属中学校(ちばふ)
役職等： 非常勤講師、ネットワーク管理者
勤務年数： 非常勤7年(うち4年間は大学院含む)
専門分野： 教育学(修士)、高校機械科、中学技術科
現在の関心事： 沖縄について、就職について
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与える」 Yes
インターネットをはじめて利用した年 92年？
インターネットをはじめて教育利用した年93年9月頃

鈴木二正(すずき つぐまさ)

deniro@sfc.wide.ad.jp

年令： 26歳
所属： 慶應義塾幼稚舎
役職等： 教諭
勤務年数： 2年
専門分野： 政策メディア(修士)、ネットワーク、
現在の関心事： 教えている子ども達を作る社会
「メールアドレスを児童・生徒 全員に与えるべき」 Yes
インターネットをはじめて利用した年 95年頃
インターネットをはじめて教育利用した年98年頃